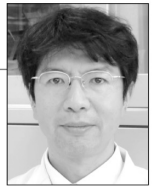
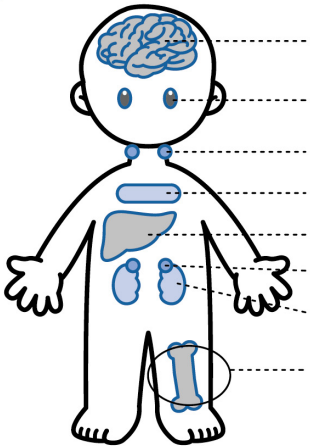
小児癌の検査について

日本臨床検査専門医会
大西 宏明



■小児の悪性腫瘍(こどもの癌)には、どのようなものがありますか？

わが国の統計では、最も頻度が高いのは血液の癌である白血病で、次が脳腫瘍、悪性リンパ腫、神経芽腫の順です。その他にも肝芽腫、腎芽腫（ウイルムス腫瘍）、骨肉腫、横紋筋肉腫、ユーイング肉腫、網膜芽腫など、頻度は低いですが様々な腫瘍があります。成人に多い胃癌、肺癌、大腸癌はほとんど見られません。



こどもに見られる癌（カッコ内は発生場所）

■小児癌の症状にはどのようなものがありますか？

白血病では、貧血や出血などの血液の症状のほか、発熱や関節痛、倦怠感などの全身の症状もしばしば認められます。脳腫瘍では、成人同様長期間続く嘔吐や頭痛が主ですが、乳幼児では頭囲拡大（頭が異常に大きくなる）で発見されることもあります。悪性リンパ腫は、リンパ節の腫れが見られますが、通常痛みや赤みはないのが特徴です。神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫は主にお腹の腫瘤、骨肉腫、横紋筋肉腫、ユーイング肉腫は手足の骨や筋肉の腫瘤が主な症状です。

このように、比較的よく見られる症状もあるので、心配して来院されるご両親も多いですが、いきなり詳しい検査（腫瘍を採って調べるなど）が必要なことはめったにありません。ほとんどが経過を見ているうちに感染症など他の病気であることがわかったりしますので、簡単な検査（血液・尿検査など）から順に受けるようにして、詳しい検査は専門の病院を紹介してもらいましょう。

■小児癌の診断にはどのような検査が用いられますか？

急性白血病では、血液検査で貧血、血小板の減少、白血病細胞の出現が特徴的ですが、いずれも必ず見られるわけではありません。確定診断には、骨髄検査といって、腰骨に太い針を刺して骨の中の骨髄という部分を採ってきて、顕微鏡で白血病細胞が増えているかどうかを調べます。白血病の種類や治療効果を調べるには、最近は遺伝子検査が用いられることが多くなっています。

脳腫瘍は、頭のＣＴやＭＲＩで異常な腫瘍が認められますが、最終的には手術で腫瘍を取ってきて病理検査で調べて診断します。その他の小児癌も、やはりＣＴや超音波検査などの画像検査で腫瘍を確認し、病理検査で確定診断となります。しかし、それぞれの癌で血液や尿中の腫瘍マーカーと呼ばれる検査値が高値になることがあるため、診断および治療効果を見るために血液・尿検査が役に立つ場合も多くあります。

■小児癌は治るのでしょうか？

小児癌は、一般的に成人の癌より抗癌剤がよく効きます。よくある“不治の病”のイメージとは異なり、白血病では種類にもよりますが5年生存率（診断してから5年間以上生存する確率）は8割以上で「治る病気」になりつつあります。固形腫瘍では、治療効果は癌の種類により異なりますが、転移がない場合は完治する場合が多く、転移があっても抗癌剤がよく効いて治る場合も多く見られます。